

環境科学部

環境生態学科のこの一年

永淵 修

環境生態学科長

2014年3月、25名の卒業（第17期）を送り出し、あけて4月31名の新入生（第21期）を迎えた。毎年スイッチが切り替わり、春を迎えることができる大学とは、実におもしろいところだなと感じつつこの1年を振り返る。

最初に残念な報告をせねばならない。浜端先生が6月に志半ばにして他界されたことである。通夜、葬儀には全国で活躍されている多くの卒業生、在校生が参列していただき、浜端先生のお人柄だなと感じたものである。また、年度も押し迫った3月には4回生の玉田さんが不慮の事故で亡くなられた。この1年間に我々の学科から二人の尊い命が奪われたことは、本当に残念至極である。

人事では、田辺先生が10月1日付けで准教授に昇任され、堂満先生も年度が変わる4月には准教授に昇任される。現在の環境生態学科教員定数は、教授5、准教授5、助教4であるが、浜端先生の件、そして倉茂先生が新年度から理事に専念されことになり、現状では教授5（新年度で4）、准教授4（新年度で5）、助教4（新年度で3）となり、准教授の定数はやっと満たされることになったが、新たに教授と助教の定数をうめる必要に迫られている。現状では、定数不足のため教員の皆様には過負荷になっており、早急に新たな人事を立ち上げねばならない。女性教員の比率も教授・准教授では3割であるが、全体では2割である。今後、国の方針もあり、我が環境生態学科も嫌でも変化を余儀なくされることになるであろう。この変化が我が学科の飛躍となればこれに超したことはない。

学科の動向について、2010年にカリキュラム改正を行い、順調に成果をあげてきていると感じられるものもある。環境生態学演習もその一つである。また、その少し前より「人間探究学」において「教育ディベート」を取り入れているが、これもその良い例であろう。惜しむらくは、単発で終わっていることである。4年間通して継続していきたいものである。新カリキュラムになり科目名から中身の分からないものがあることが気になる。私に関連するものでも「集水域・・・」がいくつかあり、教員がよくわからないのに学生、特に受験生は何を学ぶのかわからないと思う。早急な対策が必要だと思う

がいかであろうか。

昨今の少子化問題に巻き込まれ我が学科もいかに志願者を増やすかに知恵をしぼり、入試科目の変更と志願者数関連等の入試関連のデータをいじりながら検討しているが、このようなことに教員のエネルギーを費やすこと自体教員のエネルギーを低下させ魅力のない学科へと落ちぶれていくものではと危惧するものである。我々教員一人一人がいかに魅力的であるかが学科の活性度につながり、それがお客様を呼ぶ秘訣ではないだろうか。

最後にもう一つ、最近の4年生大学は短大の様相を呈している。3年になると学生は就職活動主体の生活になる。つまり、学業は2年で修了と相成っている、それ以降も単位取得には血眼になっているが。外国人雇用を増やそうとしている企業が多く出てくる中で、これでは、近隣のアジア諸国の学生とは勝負にならない。我が学科は4年で就職する学生が多い。他大学の理科系の中では出色の大学院進学率の低さである。少なくとも早くから大学院に進学を決めておけば大学院博士課程前期の1年までは学業に専念できる。すなわち5年間は学業に専念できるわけである。将来の日本のために我々教員は、学生達に大学院に進学することを進めることも4年生大学の短大化を防ぐ道ではないだろうか。それには、進学のためのサポート体制等大学内の新たな規約作りも必要になるであろう。昨今の就活騒動を苦々しく思いつつ筆を置く。

環境政策・計画学科のこの一年

近藤 隆二郎

環境政策・計画学科長

4月に新入生42名を迎えた。募集区分別にみた内訳は推薦6、留学生0、一般前期24、一般後期12名である。また、前年6月に研究室に仮配属されていた57名のうち47名が本配属となった。7名が取得単位数の不足のため本配属とならなかった。6月中旬に、3回生36名と留年生5名の計41名が研究室へ仮配属となった。ただし、4回生（以上）5名が取得単位数の不足などの理由で未配属となっている。徐々に学年の横のつながりが希薄化しているためか、個別に連絡相談を必要とするケースも増えているように思える。

7月3日に、学科としてのゼミ対抗スポーツ大会（バレーボール）が開催された。ゼミ対抗の球技大会は学科恒例行事となりつつある。学年を超えて学

生間や学生と教員との間の親睦を図ることができた。

昨年度、学科コンセプトを一新した流れとして、学科独自のパンフレットも新しく作成した。学科共通の名刺デザインも設定し、教員および学生にも共有した。本年度の広報として学科力を結集したのは、オープンキャンパスであった。従来のパネル展示中心の静的なものから、学科 OBOG らを含めた戦略会議において、いかにこの学科コンセプトを高校生に伝えるのかという点から見直して一新した。まずは、幅広い専門を持つ本学科と高校生の興味関心とをつなぐために、「発見！あなたにぴったり研究テーマ」と称して、ゲーム感覚で楽しみながら自分と教員のキーワードを探してつなぐ参加型展示空間を設置した。また、「そうだったのか！『もののけ姫』が挑んだ環境問題」として Prezi を用いた特別授業を実施した。学科教員それぞれの専門から『もののけ姫』を読み解いた内容を紹介することで、学科の幅広さと切り口の多様性を表現したものである。新コンセプトのテーマカラーが菜の花色であることから、「菜の花カフェ」として学生によるカフェも開催した。これらのメニューは充実していたものの、実施空間が奥まった場所であり、参加者の流れと空間的制約が大きく、今後の改善が課題となった。

また、学科 web で毎月の教員コラムの掲載を開始した。高校生や在校生向けに旬の話題を気軽に語っていただくものであり、それぞれの教員の新たな面を垣間見ることができる。

11月に行われた特別選抜入試では、募集人員8名に対して推薦14名の出願があった。推薦入試の志願倍率は1.75倍であった（前年は0.87倍、前々年は1.3倍）。2月・3月に行われた一般入試では、実質倍率は前期1.25倍（前年2.6、前々年1.5倍）、後期1.6倍（前年5.4、前々年1.9倍）であった。さらなる倍率のアップが課題である。

3月には45名の卒業生を送り出した。うち4年前の2011年4月の入学生は36名である。同年に入学した45名のうち、卒業できなかったもの（留年者）は9名であった。

開学20周年という節目を見据えて、11月湖風祭の日に学科同窓会を開催する予定である。800名にも及ぶOBOGの名簿整理に着手した。社会で活躍するOBOGも増えてきており、今後はより密接な関係を育んでいきたいと考えている。

開学以来、本学に多大なる貢献をいただいた秋山道雄教授が定年により3月末に退職されます。秋山先生、20年間、ありがとうございました。なお4月に、1名の教員（准教授）が着任する予定である。

環境建築デザイン学科のこの一年

張 晴原

環境建築デザイン学科長

10月に川井操先生を助教としてお迎えすることができた。川井操先生は2004年に本学科を卒業し、2010年に本学大学院で博士号（環境科学）を取得した。国際舞台で建築活動をなされ、東京理科大学の助教などを経て、本学科で教鞭をとることになり、本学科OB教員の第一号でもある。また、高田豊文先生が永年にわたり最適化技術の建築構造分野への応用研究、木造住宅の耐震要素の力学性能に関する研究などで優れた業績を上げており、10月に教授に昇格された。高田豊文先生と川井操先生の教育、研究活動の新たな展開と大学の運営管理における活躍を期待している。芦澤竜一准教授が第5回木質建築空間デザインコンテスト最優秀賞を受賞されるなど建築設計分野で活躍され、1月に優秀職員として学長に表彰された。今後のますますのご発展を切望している。今年度の卒業研究は24名が論文を、27名が設計を行った。谷口雄飛君の論文と大野宏君の作品は優れた創意が認められ、EA賞が贈られた。今後の研究・創作活動のさらなる展開が期待される。本年度の卒業論文・制作を縦覧し、都市・建築における環境の持続性や衰退する地域環境の再生に関するテーマが多かった。「環境建築」と謳っている数少ない学科の1つとして当然のことかもしれないが、今後とも時代の要請に応えられるように、常にタイムリーな研究・制作に挑戦し続けて欲しい。本年も卒業研究・製作の発表会は学生が自主的に運営している。また、学生主体で運営している「DANWASHITSU」が実り多い活動をしており、建築界の第一線で活躍しているゲストを招き、活発な議論を行っている。このような自主的活動は学生のモチベーションの向上、建築的思考の深化、組織力の育成、社会適応能力の取得などに重要な意味をもっており、確実に学生の成長と進化につながっている。本年度も本学科は学生の国際交流に精力的に取り組んでいる。本学科の正規の留学生にスペイン、中国などからの交換留学生が加わり、一層国際色の強い学科となっている。本学科はこれからも国際性と地域性を車の両輪のように、バランスよく生かしながら邁進していくと思われる。永年にわたり本学科の教育研究と本学の運営管理に尽力された布野先生が大学を去られ、時代の移り変わりが感じさせられる。一方、川井先生のような元気の溢れる若い先生が絶えずスタッフに加わり、学科に新鮮なエネル